建築家の檻

連載 8

Grasshouse

8

　辛島さんが用意してきたテープの録音状態は良好とはいえず、掻き毟るような雑音がひどい。多分、録音機の位置が、テーブルの下か服のポケットの中か、分かりにところに隠されていたのだろう。人の会話が聞き取りにくいわりには、コップを置く硬い音や、紙をめくる音などは、異様にはっきりと前面に響いている。

――最近ますます、公共事業の業者選定の方法のチェックが厳しくなって
　おりまして、その件については、なかなか難しいいうのが現状
　でして。例のジョイントベンチャーに関しても、複数の業者が以前よ
　りも入り込んできて、何かとやりにくい状況となっております。
　ですから、昔のようにウチの名前や、先生方のお口ききだけで通ると
　いう時代でもありませんし。地域によっては、電子入札ということも
　導入するケースが出てきておりまして。
――そういう細かいことは、あんたたちでしっかり考えてちょうだい。
　わたしはね、結果が欲しいの。あなたはどう考えているのよ伸雄さん。
　いまの会社の状態は、どんどん悪くなっていくばかりじゃないの。
（婿養子で旦那の伸雄氏が何かモゴモゴいっているが、雑音のため不明）
――幹部に危機感がないから、社員の意識だって、たるんでいるのだわ。
　月曜の朝礼のときの態度は何。会長の話のときに、私語が多いし。
　まずは、気持ちの問題、意識改革が必要なのよ。新しい秩序と規律が
　必要なわけ。社内新秩序のための道徳教育がね。
――もちろん、マインドや、意識改革は必要だとは思いますが、具体的に
　発注を確実に取るという方法について、もっと徹底した戦略を練るべき
　であるかと。事実、政府の公共事業の縮小などを原因といたしまして、
　準大手以下でも、いまは経営破綻に追い込まれたりしております。
　金融機関が債権放棄して、何とか命脈を保っているところも。
――誰にいっているの。知っているわよ、そんなこと。いちいち暗い話を
　ここでくりかえさないでちょうだい。あたしと会長のところには、
　いい話を持ってきてよ！　それまでは、歯を食いしばってでも、結果を
　出すように、あんたたちが、一人ひとり努力するの。わかった？
――もちろんでございます。しかし、お言葉を返すようですが、われわれだけ
　の力では、この厳しい構造改革の時代に、いかんともしがたく。

――じゃあ、あたし達、何のために給料払っているのよ。佐久間さんとこだって、娘さん今度、ご結婚されるんでしょう。そうなると、じきに、お孫さんもできるわけじゃないの。もっとも最近は、おなかがふくらんでから結婚というパターンも多いらしいけど。
――いえ、うちの娘はそういうことは、いたってオボコで奥手な方でして。
――ははん、どうだか。どこの家でも、父親だけがそう思いたがっているだけよ。(ここでなぜか、婿養子の丹下伸雄氏が、咳払いした)
――おい、律子。そう、ガミガミいうばかりじゃ、佐久間もまともな意見がいえんだろう。そうやって、あまり人を追い詰めると、世の中ロクなことにとはならんぞ。
――何をいっているの。やけに最近、人間が丸くなったわねえ。薄気味悪い。お父さんが下に甘いから、いま会社がこういう危機に陥っているんじゃないの。ねえ、わかっていらっしゃるの、ご自分で。声の張りだって、昔のパワーがなくなっているじゃない。歩き方だってオランウータンみたいで、情けない歩き方だし。だから朝礼のときも、社員になめられて示しがつかないのよ。
――馬鹿もん。オランウータンだと。わしは、何も変わっとらんわ。お前ごとき小娘に、この丹下喜作が。
――小娘とは何よ。いわせておけば、聞き捨てにならないじゃないの。ひょっとして、なに？　あたし一人がこうしてキリキリ舞いしているのが、余計なお節介だいいたいわけ。小娘が語っちゃいけないわけ。伸雄さん、貴方はどうなのよ。陰気に黙り込んでないで。
――なにも、そんなことは誰も言ってないだろ。会長がおっしゃっているのは、だ。佐久間部長の発言を、もう少し冷静になって、客観的に。
――あら。じゃあ、あたしが感情的になっているとでも、いいたいわけ。あなたはいつだって、自分が客観的だと思っていて、あたしは冷静にものが見られないと思っているのだわ。
――おい、律子。やめんか、いい加減に。佐久間だって、晴臣や犬っころの世話までさせられて、日ごろからストレスためとるんだろうが。
――晴臣？　関係ないじゃない。何いっているの、お父さん。ハルくんのこと持ち出さないでよ。義彦も抗議しなさいよ。自分の子供のことなんだからそうやって知らん顔してないで。それにお父さんは、犬っころとかいわないでよ。田舎くさいわねえ。無教養丸出しだわ。
――いえ。晴臣様、フェルディナンド様のことは、わたくし佐久間、自ら買って出たことでありまして。むしろ有難い人生勉強となっております。
――おお、そうか、それならいいがの。律子が余計なことをいい過ぎる。いつからこんなむごい、薄情な娘になったんかのう。

――むごい娘？　薄情な娘。それじゃなに、あたしが、独りよがりで余計なこ
　とをして、会社をひっ掻き回してるっていいたいわけ、お父さんは。
　跳ねっ返り娘だの、女だてらにだの、女帝だの何だの罵られながらも、
　あたしは…、あたしは……。
　(急に激して、ばたばたと音が響き、興奮状態になる。周囲もざわめき始め、
　長老連中が、律子専務を取り囲んで慰めにかかる様子)
――あなた。あなた、どう考えているのよ伸雄さん、あなた自身は！

＊

「姫君、ご乱心ですな」色川さんは下唇をとがらせた。
「これ、律子専務ですよね」
　僕もイヤホンを外して二人を見た。
　わざわざそう言って確認したのは、実際に会ったときの印象は、ここまで酷くはなかったからだ。
「ほかにいないわ、こんなヒステリックなおばさん。ずいぶんとまた塔の立った小娘なわけだが。伸夫さんというのは、副社長の旦那か」
「ええ。あのインド人物理学者みたいな顔した人。『一社一丸報恩道』のボランティアお掃除チームの管理者でもある。それと、佐久間さんという人は、喜作四世の晴臣と、犬のフェルディナンドの御守り役やらされている人ですよ。気難しい顔して、馬鹿馬鹿しいことをさせられてる。しかしこんなのでも、この厳しいご時世に経営会議になるんですか」
「その辺の小中学校のホームルームだって、もう少しマシですわな」
　色川さんがしぶい顔で、タバコに火を点けた。
「いや、だからさ、伸雄以下の七奉行が、有能な実務家、管理者として、楽屋裏ではちゃんと押さえてきたのさ。これまでのところはね」
　辛島さんが、脇から口を挟んだ。
　彼はパイプの端を歯で齧り、両手の長い指を開いたり閉じたりして弄んでいる。
「ぶっちゃけて言えばよ、いま聞いてもらったのは、要するに、人事権を握っているオーナー一族に対する、一種のセレモニーなんだよ。経営戦略会議というよりはね。まあ、御前会議みたいなもんだな。それと、この厄介な女帝のストレス発散の場でもある」
「たまらないなあ」
　僕はバーボンを二人のグラスに注いだ。
「でも、建築とか土建業界について、詳しいんですか。律子専務って」
「大学は確か英文科だったと思う。秘書の芳田さんに聞いたら、卒論はエミリ・ブロンテだったそうだ」

　辛島さんは首を傾げた。
「はあ、英文科。ブロンテって『嵐が丘』とか『ジェーン・エア』でしたっけ」
「エミリの方だから、『嵐が丘』ね。ヒースクリフが出てくるやつ」
「ああ、そうなんだ。確かに、かなり荒涼とした性格ではあるけれど。でも、ゼネコンとは、ぜんぜん関係ないですよね」
「いやね、そこで技術系の専門知識のない彼女は、人間掌握術としての精神論を持ち出して割り込んでくるわけよ。イニシアチブを握りたい一心でね。マインドだの意識改革だの、道徳教育だのいってるでしょ」
「そう。社内新秩序だとかな……。どうせ、ビル建設の設計がどうだの、積算がどうだの、力学的な構造がどうだの、一級建築士が扱うような、建設現場の難しい事を、この律子専務にいっても、わかりゃしないだろうからねえ。
　例えば、戦後の政権与党の楽屋裏と陰湿に結びついた喜作会長は、昔からの人脈を動かして、大きな仕事を取ってきた。それが奴のカリスマだった。
しかしこのご時世で、これまでのゴリ押しも利かなくなってきた。丹下ファミリーとしては、二代目以降、どのように権力を維持し続けるのか、そこが課題なわけだ。まあ、そんなとこでしょ」
　色川さんは薄く目を閉じ、腕組みをして、そうつぶやいた。
「それもそうなんだが。自分史があるだろう、喜作爺さんの。あれは、本人は偉人伝だとかボケかましてるけど、要は自分の自慢話のオンパレードにしたいわけ。一方、律子専務の方は、ポスト喜作時代の神話作りに利用したい。つまり、喜作とそのファミリーを、特別なオーラで包みたいんだな。何というか、社員よりも一格上の、いわば高貴な殿上人にまつりあげたい。自分たちと一般社員との歴然とした格差をつけたいわけだな。ロシアふうにいえば、いわばオリガルヒだ。人間というのは、どうやらほんとうは、差別するのが大好きなんだな。今回の喜作の自伝プロジェクトの狙いも、そんなところにある。
丹下ファミリーを、何か高貴なる特権階級にしてしまう。そういう魂胆で、会社全体を自分達に都合の良いイリュージョンの煙幕で包み込みたい。こういう狙い自体が、すでに矛盾の芽を孕んでいるわけなんだよね」
「え、え。なんですかそれ」
　僕は思わずグラスを落としそうになった。「それじゃ、僕の役割って、そんな愚かしい洗脳に、加担すること？」
「まあ、人生、辛抱辛抱」
　猪八戒が僕をなだめるように、目を閉じて右腕を伸ばした。
「つまり、よくも悪くも喜作時代というのは、丹下建設の黄金の創世記だったんだ。まあ、馬鹿馬鹿しい人類史のメタファーでいうとね。金の時代、銀の時代が過ぎだ。これからが、厳しい夢のない銅の時代、鉄の時代となってゆく。そのために律子は、社員を洗脳しようと、やっきなわけさ。そこで『人生連峰』

を一種のコンセプトを埋め込んだバイブルとして、社員たちを再教育しようという腹なのさ。これは言葉をかえれば、これまで社内では特権階級であったオーナー一族、丹下ファミリーの危機感の顕れでもあるわけなんだ」
　何という愚かなことを考える人達だろうと、僕は思った。
「となると、あの自分史は、『古事記』『日本書紀』、いや、聖書か。ごくろうさんなこってすなあ、羽木ツトム大先生。君は、稗田阿礼かね」
　汚らしい指を氷に突っ込み、したりげに色川さんはいった。
「ヒエダノアレはやめてくださいよ。冗談じゃないですよ。人に厄介な仕事押しつけといて。いい加減にしてよ」
「あら、色川ちゃん、ボトル空いちゃってるわね。新しいの一本、入れる？」
　角に座っていた常連客の相手をしていたママが、唐突にいった。
「そう、かな」
「入れなさい。入れなさい。フォアローゼスでいいのよね」
　さっそくママは背伸びして、暗がりの棚に手を伸ばした。黒いシャツの下はどうやらノーブラのようで、これこれ見よがしに揺れているので、ついつい目が行ってしまう。
　やがて、猪八戒にはちっとも似合わない赤薔薇のラベルのボトルが、カウンターに登場した。色川さんは、ママに一杯作ってもらうと、氷と酒の混ざった琥珀色の液体に、いつものように中指をつっこみ、しぶしぶしぶ掻き回した。
「このボトル、悪いけど。お前と割り勘だからな」
　いささか不機嫌そうに、彼はいった。
「え。わかりましたよ。……もう、ケチなんだから」
　僕たちは少し酒を飲むと、もう少し録音テープを聴いた。

＊

――なんだね、その板は。
――このボードをちょっと見ておいて欲しいの。いま私、社訓を作らせているわ。これを『人生連峰』に入れるのよ。そうじゃないと、全体がひきしまらないわ。いってみれば丹下グループの企業文化ね。精神的な教育が大切なのよ。
「一社一丸報恩道」から始まって、「我を捨て、我を創りかえ、我を活かす」
「朗らかに集いつつ、無我の中に、社を荘厳せよ」まで、十項目あるわ。でもまだ順序は未定よ。つまり、これはウチの会社の憲法みたいなものね。憲法改正よ。でもね、これはお父さんが昔からいっている内容を、私が再解釈して、真の意味を引き出して、現代的な発想をアレンジして解説を加えたわけ。つまり、丹下イズムの進化形の現代版ね。

――なんじゃと。わしに無断でか。そんな、憲法改正など、いらんぞ。おい、そんなこと、これまでちっとも聞いてねえぞ、律子。あの本は、俺の偉人伝なんだから、そのままでいいんだ。

――なにをいっているの。その、偉人伝は、やめなさいよ、馬鹿みたいだから。それに、お父さんの言っていることは、もう時代に合わないところがあるのよ。これからウチの会社だって、どうなっていくかわからないわ。もっと強力な体制が必要なの。現状の変化に対応しなければはならないの。

――世間が変化しようが、何だろうが、わしの人生はかわりゃせんし、人生観だって変わるわけないだろうが。

――それが間違っているというの。社員をどうやったら、その気にさせるか。身を粉にして働くようなモチベーションを、いかにして与えるか。

イソップ物語に、『北風と太陽』というお話があるでしょう。お父さんみたいに、怒鳴りつけたり、棒でバシバシ床を叩いたりするのは、いまの幹部連中でもう終わり。北風だけじゃ、どうしょうもないの。旅人の服を脱がすには、つまり、思い通りに動かすには、太陽も使うのよ。だからといって、日向ぼっこさせるために、連中を雇っているのではないわ。いざとなったら、どうどうと、北風を使うの。それもときどき、予測もつかないようなショック療法として、凍りつくような北風や雷雨や、雹や、霙を浴びせるのよ。台風や地震もね。

――おい、律子。経営ってのはな、童話じゃねえぞ。

――心理学よ、経営は……。私ね、いろんな集団心理や社会学や政治学の本読んで、勉強したの。つまり、羊飼いが、羊の群れをどう思い通りに動かすかってことなの。牧羊犬や、ときには狼を使ってね。だから、ちゃんと訓練した恐ろしげな狼や、ガラガラヘビの登場も、あの自分史の中には必要なの。

そういえば、倉林のところが寄越した右翼とか、ヤクザとかとの揉め事があったでしょう、大金毟り取られた件。あれを、もっと私たちに都合よく書き換えるのよ。この会社の中では、私たちこそが立法者なんだから。

――立法者だと。なんじゃそりゃ。お前のいっとることは、さっぱりわからん！

――わからなくていいわよ。日本は国会議員すら、自分が立法者だってこと知らないんだから。法律は官僚が作るもんだとばかり思っているし。まあ、代議士ったって、この国では、三世議員のぼんぼんとか、スポーツマンあがりとか、低能タレントばかりだから、仕方ないんだけどさ。

そうねえ、優秀な人間はどこへ行っても、５パーセントもいないものよ。正直いって、１パーセント未満よね。支配層というのは、「太陽と北風」の両方の駒を、的確に操作して、旅人を囲い込み、狭い谷間や、入江に追い込むわけ。そういえば昔、お父さん、福島の川で、ダイナマイト爆破させて、魚の群れを気絶させて大量に獲るやり方、教えてくれたわよねえ。つまり、あ

れなのよ。善と悪の両方の力を冷ややかに計量して、黒白二つを、ワンセットで同時にコントロールするわけ。優れた人間は善のイリュージョンにも悪のイリュージョンにも、巻き込まれないで、超然と顔を反らしているものだわ。……ね、わかった？　これが、ほんとうはお父さんがこれまで動物的な直感で行ってきて、私が自覚的にマニュアル化しようと思っている哲学なのよ。つまり、そこにいる義彦はもちろん、四世の晴臣の代まで使える帝王学を遺しておいてあげようという親心なのよ。

＊

「あの……」僕は顔をあげた。「聞きました？　いまの」
「聞こえたよ。何をこのオバハン、とち狂ったことを」
　色川さんも、顎を撫でた。
「何というのか、ねえ。傍から見ると病気としかいいようがないんだが。往々にして、日本のファミリー企業にはこういう病巣がはびこることがある。律子というのは非常に個人的、かつヒステリックな優生学の信奉者らしくて、社員を顎で使うのが当たり前だと、根っから信じ込んでいるらしいんだ。会社が傾きかけてきて、それを崩されるのが我慢できない。どうやらこの妄想、本気らしいんだな」
　辛島さんがパイプの角で、こめかみを上下にこすった。
「……優生学って」
「ユージェニクス。まあ、先天的に支配的な種族と、被支配的大衆がいるという、学問とはいえない似非学問さ。一握りのエリートは、愚かで非効率的な大衆の数量を決定することができる。牧場主や養魚場のオーナーが、家畜や魚の個体数を制限できるようにね。まあ、生物学の装いをまとった人種差別の温床となるような思想だな」
「ユージェニクスってのは、ほら、あれよ。ナチスドイツの差別思想」
　色川さんが続けた。
「自分達がルールを決定する選ばれた者たちで、それ以外は愚かな大衆、羊どもだという。もともとはヨーロッパの貴族とか王族の発想じゃないか。いかにも、蝶よ花よで育てられてきた苦労知らずの姫君が、好みそうな思想なわけ。律子って、普段から、他人が馬鹿に見えてきてしょうがないんだろうな。取り巻き連中の家老どもは、皆、保身のために、姫君にそういうポーズをとるしね」
「そう。それがさ、結局は、アウシュヴィッツや、ヒロシマ、ナガサキまでいってしまうんだよ。つまり、異民族の大量虐殺の背景にあり、それを肯定できるという、恐るべき思想なんだ。二十世紀の闇のロマンだな」
「なんか、ですねえ、辛島さんがいうと、時代がかっていて、左翼っぽく聞こえるんだわな。……まあ、ともかく、あのオバハン、喜作が創始した企業内ファシズムを、秘かに完成させたいんだよ」

「おっと、ナンチャッテ右翼の色川氏には、言われたかないよ、まったく。とはいえ、僕は本物の民族派には、一応の敬意を表するけどね。……いずれにせよ、彼女の言う新社内秩序。お姫様ユージェニックスは、いずれ破綻するのではないかと、僕は見ているんだが」
「はあ、お姫様ユージェニクスって」
　僕は思わずのけぞった。
「うん。妄想の社会工学ね。彼女は、他人というのは操作可能な存在だと思っているから。自分達はルール設定者であり、善悪の彼岸に立てる者だと思っている。ナンセンス！と、そこで僕は言いたいわけだけどね。そして、この流れで出てくるのが、あの山梨の施設さ。何年か前に作られた富士の裾野の研修センター。別名、人格改造・再教育ファーム」
　辛島さんは皮肉な笑みを浮かべて、ニヤリとした。
「経営陣に批判的な社員は、そこで再教育させられるんだ。ＩＱテストとか身体測定から始まって、やたらスローガンを暗唱させられるらしい」
「それって、ひょっとして強制収容所？　なんだか、共産圏みたいだ……いや、ほとんどカルトの発想かな」
　僕の目の前でグラスの氷が、カチャリと崩れた。
　タバコの青白い煙が、カウンターの上を薄い雲の層のように、ゆっくりと移動していった。

(続く)

建築家の檻　8

http://p.booklog.jp/book/97960

著者 : Grasshouse
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/97960

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/97960

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ